

オピオン

患者への信頼回復

—カルテの開示に思う—

北区支部 瀧内慶夫

自分の記憶で40年も前だったら、私の過ごした田舎では、自分や家族が病気になったとき、生活圏の中の医師に託して、最善を尽くしてもらえば、結果は家族は受け入れた。そのころ診断機器も現在より比較にならないほど粗末なものしかなかった時代で、医学が未発達であるから、当時の町でのうわさをつなぎあわせると、今では考えられないような低い医療事情だったろうと思う。病気に対する知識は医師といえども未知の部分も多く、病状を家族に説明するにもデータの不足は経験やカンで補ったのではないか。説明を受ける側はさらに理論的に理解できるはずもなく、ひたすらその医師に患者の運命を託すしかなかったのではないか。家族の心境は「先生に一切お任せします、結果について異論は申し立てません。」ということで、後は祈るしかないというところが本音ではなかったか。もちろん異議を唱える根拠になる資料もなかったからだろう。平均寿命は今よりも10歳以上少なかったがそのことだけのために今よりも国民が不幸であったとは到底思えない。

医学は進歩して客観的な患者の検査資料が入りやすくなったし、病状を分かりやすく説明できるようにもなった。医学情報が満ちあふれてきて、最先端の医学でもそれほどの時間を置かず一般の家庭に情報が届く。それぞれの知識レベルで疑問を持ち、あれが良くてこれは駄目だとか、人が集まると健康のことが話題になり、間違ったことでもっともらしく講釈する人もいればそれに惑わされる人も多い。マスコミの情報提供も民間療法の紹介などは無責任なものも多い。ものごとを一方向から見て批判するものも出てくる。医療の専門家ではない患者としてはどの情報を信じたら良いのか分かっていな

い。だんだんと医師の言うことを素直に受け取らなくなっているのではないか。また初めから医師のあら捜しをしようと考えているものもでてくる。新聞の不正確な不正請求の報道などがますます誤解を深めたし、ハレンチ事件に医師が関与していると、マスコミではことさらに大きく取り上げ医師を悪役に仕立て上げた。世の中が忙しく動くようになり、人は他人や社会に対し初めから疑ってかかる風潮となり、ますます医師に対する信頼は薄れて行った。

医師免許を持っていれば多少変わり者であっても違法ではないのであるし、多少我がままであってもその異常性を指摘される機会は少ない。独りよがりでもすぐには破たんしない。金もうけに走る医師がうわさになったり、犯罪として報道されたり、関係者によって告発されるような時代となった。個人の権利意識も高まってきた。患者が医師と初対面のときには医師の品定めが行われている。「ちょっと油断すると金もうけの種にされるのではないか」と見られているように感じられることもある。

実に医師の信用は失墜しており、患者は医師としての自分に何を期待しているか、患者の人間性を見定めてから診療に当たらなければ、場合によっては足をすくわれかねない。患者は医学知識に乏しいことはいうに及ばず、不合理な行動があることを計算に入れて対応するが、人間としてお互いの立場を認めるといことが失われて残念に思うこともある。

保険者機能の強化、レセプトやカルテの開示、など、医師の権威が薄れて行く一連の変革、これらが進んで行った背景には医師に対する不信任や医師のしたことの中に不正がないかどうかチェックし直すとか、医師のなかでも信用でき

る者とそうでない者を区別しなければいけないとか、医師の特権を振りかざすことを苦々しく見ていた人々の積もり積もった思いが形になったかとも思われる。大蔵省や厚生省の大物役人の悪が暴かれ、国民から見ればいままでも手出しできなかった部分の悪が懲らされて小気味がよいのと同じように見られている。

世界は社会機構の成熟過程が進み、閉鎖性とか特権階級というものを排除しようとする時代である。こういうときにあまり既得権にこだわって、未練がましく抵抗するのは自然科学者としても逆流ではないか。

立場を変えて、患者になったときに思うような不満や疑問は医師は専門家としてはそのつもりで心掛けると誤解を解消できる立場にあります。“寄らしむべし、知らしむべからず”という時代ははるか昔に終わっていて、医療の世界といえども成り立ちません。

例えば不正請求が全く存在しないなどというような不自然なかばいかたは逆効果ではないか。むしろ事実としてあるものは認め、悪いことは悪いとはっきりさせ、医師の集団の自浄性を高めて清潔感を強調すべきだと思う。医師は自分

の立場を守ることになりすぎていないか。そのために患者の権利や利益を踏みにじていることに気がつかないようなことはないか。いつも人間としての良心に従うことが必要であると思います。このことが実践できていないと客観的に認められないときは医師の裁量権や法律的保護が一つひとつ失われて、だんだんと適切な医療がしづらくなってくる。同時には医師に期待されなくなってくるともいえます。目の安全を気にし過ぎて本当に大切な信頼を失いつつあるのではないか。

ちょっと医師側から見ると不本意ではあるが、カルテの開示についても患者の望んでいることであり合理的に受け入れて協力する方が良いのではないか。あら捜しを警戒するあまり医師側も患者を油断ならない“敵”と位置付け“患者のために頑張るやろう”という意識が薄れているのではないか。患者も医師も少し我がままを控えて、小さなことに目くじらを立てず、信頼関係を修復しておかなければますますぎくしゃくした関係が深まって行くのではないかと心配である。
(麻生整形外科病院)

札幌市医師会 世代交代懇話会からのお知らせ

このたび、現会員及び元会員遺族より、世代交代懇話会に診療所の譲渡及び賃貸斡旋方の申込みがありましたので、ご希望の方は、下記にご連絡下さいませようお知らせいたします。

賃 医 院

診療科目 外科 (有床)
 建物概要 鉄筋コンクリート造 2階建
 賃貸部分 1階 診療部分 185㎡
 2階 病室部分 190㎡
 その他 委細面談
 所在地 〒065
 札幌市東区北31条東7丁目3番20号
 連絡先 ☎(011)232-0493

札幌市医師会世代交代懇話会は、札幌市医師会会員が死亡又は長期疾病等のため、やむを得ず病院あるいは診療所を閉鎖又は閉鎖しようとするとき、当該会員又は遺族の要請に基づき、継承者の仲介等に協力し、もって地域医療の確保を図ることを目的としております。